

115

特254

558

重大時局に  
處するの途

一に軍備の充實あるのみ

長谷川 尙一

始



特 254  
558

重大時局に  
處するの途に

### 一に軍備の充實あるのみ

長谷川 尙一



重大時局とか國難來とかいふことが聊か近來の常套語のやうになつて、聲ばかり大  
きいが、國民上下に更に緊張の氣勢を見ないのは甚だ遺憾に堪へざる所である。

元來今回の日支紛擾は我國の軟弱外交に對する支那の侮蔑に其端を發し、日本與し  
易しと見た支那の不法行爲に、多年隱忍自重して來た我國が終に勸忍袋の緒を切つて  
敢然正義擁護の處置を執つたのであるが、支那は其慣用手段とする逆宣傳の手で、事  
件の直接責任者たる自己の不法行爲を不知顔に、日本の行動は滿洲を手に入れやうと  
する不當の侵略であると揚言し、國際聯盟に訴へて其審判制裁を求めた、而して聯盟審  
査の結果は全會一致で支那の言分通り日本の行動を不正不當なりと斷定し、新興滿洲  
國は結局日本の傀儡に過ぎざるものとして、其成立を承認せざるに決定した、此聯盟  
の決議を以て加盟國の東洋に關する認識不足に因るもの、如く論ずるは見當違ひの觀

察である。列國は東洋の事情を充分に認識して居る。唯都合上認識せざるが如く装ふて居るに過ぎないのである、判つて居て判らぬ顔をして居る者に、判らせやうとして苦心するのは無駄な努力である、國民は今少し歐米野心國の腹の底を認識する必要がある、正義の命ずる所によつて行動した日本が、聯盟の決議を不當として決然脱退したのは當然の歸着であるが、日本が聯盟の決議に反して飽くまで所信に邁進せんとするには、その行動の正當なる事を徹底的に世界列國に了解首肯せしめ、聯盟の決議を改めしむるか、然らざれば聯盟の不當の制裁を撃破邁進するか二者其一を選ぶ外ないのである。即ち我國は營に孤立無援の地に陥つたに止まらず、世界列國の高壓を排して、如何にして局面を打開すべきかといふ建國以來末だ嘗て經驗せざる國難に當面して居るのである。

國際聯盟は日本の對支行動を不正不當なりと決議はしたが、日本を強制して其行動を改廢せしむる實力を有せざるを以て、面目維持の必要上切りに米國引入策を講じた米國は勿論聯盟の決議に異存なきのみならず、東洋進出政策の邪魔者たる日本に、機

會あれば一撃を加へんとして虎視眈々たるものであるが、未だ其機にあらずと見て暫らく聯盟に加はるを避けた。而して支那は聯盟をして日本の行動の侵略的にして不正不當なることを決議せしむるに成功したが、聯盟に日本を強制する實力なきに失望し、更に米國の東洋進出の野心を利用して以夷征夷の慣用手段に出でんと試みた、支那の魂膽を看取した米國は巧に機會を捕へ、先づ大艦隊主義を振かざして我國に威喝の瀕踏を試みた、威喝は米國の十八番である、これに乗れば忽ち其術中に陥つて終ふ、日本の弱腰政治家が戦争を恐れて軍部を押へたとすれば、米國は得たりと奥の手を出して嵩にかゝつて押して來やうと云ふのである。然るに大艦隊威喝の結果は豫期に反し徒らに日本國民を興奮せしむるに過ぎないのを見て暫く形勢觀望の状況にある、輓近日米戦争の必然性を説くもの多く、更に又日露戦争を説くものあり、日米日露戦争に關する著述の切りに出版せらるゝを見る、日米日露果して戦ふべきか、米國は恰も送り狼の類である、轉べば即ち喰はんと期して居る、日米開戦を避くる途は唯轉ばざるにある、轉ばざるは即ち彼をして乗せしめざる國防の充實である、米國が如何に我に

一撃を加へんとして焦つて見ても、現在の情勢の下で單獨に手を下し得ない事を熟知して居る、會々米國の爲めに絶好の道連れとして露西亞が登場した、露西亞は世界無比の高壓的専制政治の下に、産業國防の五年計畫を斷行して着々其實績を擧げて居る、殊に國防に於ては悉く最新科學の粹を採り、就中其空軍は世界第一と誇稱する所のものである、而して露西亞は日支紛擾以來東邊の軍備に全力を注ぎ、今や全線の配置陣地の構築遺憾なく完成し、命令一下行動開始の準備が出来て居ると言ふ。

斷交十六年の米露が最近俄に接近して急轉直下國交を恢復した裏面の消息は、精しく説明するまでもなく、米國が對日行動の好伴侶として赤露に握手の手を差延べたに外ならない、一時中外の注目を集めた東支鐵道賣買の交渉が爾來杳として消息を傳へざるを何と見るべきであらうか、假りに東支鐵道の賣買が、米露の間に成立したと想像して、日本はこれを黙過し得るであらうか、假へ斯くの如き事態は到來せぬとしても、東支鐵道條約によれば、同鐵道は開通の日から三十六年後には、支那が代償を拂つて之れを回收し得る事になつて居る、而して其三十六年後といふは、偶然にも恰も

千九百三十六年に該當する事を記憶せねばならぬ。

英國は即ち如何、日英同盟の往時を顧み翻つて日英今日の情勢を考ふる時、今更ながら國際關係の變轉極りなきに驚くのである、由來英國は筒井順慶式の國である。自國の利益の爲めに機會の乘ずべきものあれば何時でも我國に矛を向けて來る。米露接近以來日印協商は遅々として進捗しなかつた、蓋英國一流の日和見の結果である、更に輓近英本國に於て日本商品封鎖法案が議會に提出されたと傳へられるが如き、英國の態度は漸く露骨になつて來た。

獨逸も亦最近日本商品の輸入統制を發表した、斯くして聯盟規約に所謂經濟封鎖の壓迫は世界各方面に涉り着々實行を見るに至つた。

要之聯盟は我國をして聯盟脫退を餘儀なくさせて置きながら、日本を以て其決議に反抗して飽くまで横車を押通さうとする横暴國となし、何時かは日本に制裁を加へざれば面目が立たぬといふ立場にある、米露は聯盟に加入して居ない自由の立場に於て、日本の行動を掣肘せんとし其準備に汲々たる状況にある。而して聯盟たると米露たる

を問はず、準備完了の時機こそ何等かの形式に於て日本に對して最後通牒の果し狀を突附けて來る日である事を覺悟せねばならない、然かも其機會は刻々迫り來つて居る、これ吾人が時局重大を叫んで國民の奮起を促し、上下一丸となつて國難に當る覺悟を固める必要を唱ふる所以である。現内閣は成立以來非常時局に對應すべき國策樹立の必要を認め、或は五相會議或は内政會議を開きて銳意對策を講じて居る様であるが、今は斷行の時機で悠長なる小田原會議の場合でない、豫算の難關で一時危険に瀕した齋藤内閣は辛ふじて命脈を繋いだが、其首の値僅に五百萬圓に過ぎずと言ふに至つては唯啞然たる外はない、然かも國家の存立に絶對必要な燃料豫算として僅々百數十萬圓を計上し、是を以て燃料國策を樹てたと思つて居るらしいが、これ恰も蟲の良い神佛の參拜者が、白銅一枚の賽錢を投込んで家内安全子孫繁盛の念願が叶つたと安心して居るのと同じで、此位の事で現在の難關が切り抜けるのなら、難關でも重大時局でも何でもないのである。國家存亡の危機を前にして豫算爭奪の内輪揉めした揚句、僅か五百萬圓で片が附いたと云が如きは徒らに外國の輕侮を買ひ、彼等をし

て日本の弱腰政治家を畏伏せしむる事今一息のみと増長せしめ、終には平和の解決を不能ならしむるに至る恐なしとしない。世界列國の重壓下に立つて國家存亡の危機に際し、軍政外務内政と對立拮抗すべき場合でないのは言を俟たないのである。國家存立の爲めに軍備が絶對必要なりとせば、暫らく他の凡てを犠牲としてもこれを完成すべきは當然である。これを一家の場合に見るも、一家破滅の危機難關に當面しては、慣行の豫算を墨守して家政を料理するを得ず、一時あらゆる豫算を一家建直しに充當し、貯蓄の支出は勿論猶足らざれば負債亦避け得られないのである。此際子女の結婚も計畫中の新築も慣例の年中行事も、一切これを中止して其豫算を一家建直しの費途に振向けて破滅を免れなければならぬ、蓋家あつての家計豫算であるからだ。國家の場合も亦之れに異ならず、軍政と言ひ内政と言ひ外務と言ふも國家あつての上の事である、然るに近時往々軍部偏重等の言を耳にするは其何の意なるやを知るに苦しむのである。今や世界列國は米國を先頭に我國の門前に押し寄せ來り、喊聲を擧げて門を破らんとして居る、然るに門内では徒らに小田原會議に日を送り、大黒柱の總理大臣

は好々爺にして斷行の勇氣に乏しく、一座を見廻して應急の意見を求むるのみ、長男の軍部大臣は武器の用意を十分に於て、敵若し我門戸に一指を觸るれば直ちに正當防衛としてこれを撃破せんと主張すれば、女房役の藏相は米屋酒屋八百屋一家の暮しに必要な諸拂をさし置いて武器は買へぬと言ふ、老主人は老女房の意見尤もなりとして武器の買入を見合せて、門前の敵は用意手薄と見てドツトと雪崩れ込んで来た、ソレ防げと長男に命じた所で徒手空拳では如何とも仕方がない、一家は貪慾な外敵の蹂躪に任せ妻子眷族身賣の憂目を見るが如き悲劇は決して一場の夢物語ではないのである、列國の袋叩きを免れんとせば、彼等が東になつて來ても之を突撥ねる丈けの軍備を必要とする、軍備の充實以外に現下の難局を打開し、國家の平和を維持する方法は求め得ないのである。抑も軍備を以て争鬪侵略の具となすは當らず、眞の國防軍備は正義を擁護し戦争の慘禍を未然に防ぎ、人類の平和を保障するに於て初めて其本然の用を爲すのである。由來我國の軍備は正義王道を以て本義とし、他國の不當の壓迫に對し我國の有する正當の權益を擁護し、暴威を膺懲するを以て其の使命として居る、

即ち日清日露の戦役に見るも、敵國の不當の侵害に對し正義擁護の必要上止むを得ず立ち上つた受身の戦争であつた、我國が世界大戦に参加したのも亦この精神からであつた。此の意味に於て我國の軍備は、領土擴張弱國侵略を目的とするものとは根本精神を異にし飽くまで防衛的なるを特徴として居る。日本を軍國主義だとか侵略主義だとか言ふものがあるが、現在日本の軍備を以て果して何れの國を侵略し得るであろうか、自主自衛の目的を達するにさへ足らないのである、蓋先のロンドン軍縮會議に於て、英米の侵略的軍備五五に對し、我國が國防力にも足らぬ三の比率に押しつけられたのは不當もまた甚だしきものであつた。此際斷然平等の軍備を建設するは我國當然の權利にして他國の容喙を許さないものである。世界大戦以來列國を通して軍備の充實兵器の進歩は駁々として停止する所を知らず、平和會議と言ひ軍縮會議といふも要するに國際關係の表面を装ふ空文字に過ぎず、今や列國は國防の必要以上の軍備の競争に鎬を削つて居るのは、つまり其目的が弱國侵略にあるからである。思ふに第二の世界戦争の慘禍は到底嚮の世界戦争の比に非ず、恐らくは何億の生靈を滅し交戦國の社

會組織の根底を覆へすに至るであらう。

列國の軍備競争に於て就中刮目すべきは空軍の進出である、將來の戦争は全く其外形を一變し戦鬪の主要部は空中戦となるであらふ、今日の航空機の航空能力は約千六百哩であるから、往復を通算して約八百哩の遠距離に對して偵察攻撃の能力がある、即ち浦鹽、上海、マニラ何れからでも日本の主要都市の上空に敵國の爆撃飛行機が現はれて爆弾を投下して、悠々引返すことが出来るのである。赤露の空軍は世界第一を以て任じ其有する飛行機二千五百臺、數に於て私の三倍以上である。米國の航空技術の發達は世界に冠たりと誇る所のもの、米國の一航空將官は高度九千呎よりする爆弾投下に於て八十パーセントの命中率なき飛行學生は落第生なりと豪語して居る。伊佛英獨も亦各優秀なる空軍を持つて居る。列國空軍の進歩を見、顧みて我空軍の現狀に想到すれば誠に寒心に堪へざるものがある。支那の一千臺の飛行機を有する空軍建設の計畫を夢想視して一笑に附し去らんとするは小敵と見て侮るものである。精銳なる米露の空軍の來訪に應酬するに足るべき帝國空軍の建設充實は國防當面の急務であつて、

東洋平和の保障も亦我空軍の完備によりて初めて全きを得べきである。

英米獨露切りに東亞進出を志し、老大國支那を料理して其美肉を爭奪せんとして居る、彼等が俄に其魔手を現はさないのは我日本が正義の眼を見張つて控へて居るが爲めである、然るに支那は自國の美肉に垂涎する野心國の手先となつて抗日工作に餘念なく、自ら墓穴を掘るに汲々たる實狀にある。此間に處して列國の東亞侵略の野望を防遏し、其爪牙を逞ふするを得ざらしむるは即ちこれ我日本の使命である。然かも我國は孤立無援全く獨力を以て此大使命を敢行しなければならぬ地位に立つて居るのである。即ち余は國家存亡の危機に直面せることを絶叫し、國民上下一層奮勵努力あらゆる犠牲を忍んで國防の充實殊に空軍の完成に全力を注ぎ、以て國家の安泰を謀り、人類平和の王道精神を普く世界に宣揚せん事を高唱する、非常時に處する將に非常手段によるべく、而して非常手段は一に軍備充實の斷行あるのみ、嘗て大正九年四十三議會に於て、所謂八八艦隊の建設費八億五千萬圓の可決せられたるに當り、余は島村軍令部長の依頼により、當時の海軍大臣加藤友三郎氏に面會して、國費多端の際にも拘ら

ず八八艦隊建設を議會が協賛したのは世界列國との均衡上已むを得ざるに出たのであるが、是を動かす爲めの石油の自給自足が無ければ、折角の艦艦も無用の長物に過ぎず、此際即時石油國策を樹立せられんことを力説したのであつた、而して石油國策を實行しても石油がないと言ふ事になれば寧ろ國防の方針を變更して、潜水艦、航空機等の設備を完成し籠城主義を採るに若かないのではないかと論じたのであつた。また昨年余は公債五億圓を發行して燃料國策を樹立し、以て國家の生存を維持すべきことを主張した。然るに余の多年聲を大にして叫び來つた燃料國策の未だ樹立せられざる内に、世界は進展また進展、早くも航空機萬能時代になつて終つた。即ち余は更に「非常時公債拾億圓を發行して、三年間に五千臺の飛行機を有する空軍を完備せんこと」を主張する。空軍さへ完成すれば我海陸の兵力を増大するに足りる、露國が僅々五ヶ年の間に一躍して世界の強國に比肩する軍備を有するに至つたのは、要するに空軍の充實に因るのである。最近我國の商工業は異常の發展を示し世界の各方面に進出して來た、これに對して列國は不當の障壁を設けて我商權に壓迫を加へて居る、

折角海外發展の曙光を認めて來た我海外貿易も、軍備の後楯がなければ外國の不當の壓迫を被つて終には萎縮退嬰を免れないのである。一部の論者は稍もすれば金がないの言分にして、軍備ばかりやつては居られぬと言ふものがある。軍備さへ充實すれば對外貿易は順調に發展し、金無論者の泣言等は一掃されるのである。英米兩國が最近軍縮條約極度の大艦隊建設の計畫を發表したのも、結局自國の海外貿易の尻押をして、商工業の力で世界の隅々まで自國の勢力範圍としよふと云ふに外ならぬのである。支那の形勢の變轉極りなく朝を以て夕を計るべからざるを氣に病む者があるが、支那は要するに其背後にある野心國の操縦に従つて踊るロボットに過ぎないのであるから、夫れ等野心國の横暴を防ぐ丈けの軍備さへ充實して置けば、支那の形勢が猫の眼のやうに變化しやうとも、如何に踊ろふとも全然意に介する必要がないのである。重ねて言ふ日本の生きて行く唯一無二の途は一に軍備充實の斷行あるのみと。

昭和九年一月十一日

以上印刷物、政府各省及樞密院、貴族院、衆議院各議員及新聞社、雜誌社其他へ贈呈ス



昭和十一年十月十五日 印刷  
昭和十一年十月十七日 發行  
昭和十一年十一月一日 再版發行  
昭和十一年十一月十日 三版發行  
昭和十三年三月十七日 四版發行

非賣品

著者 長谷川 尚一

發行者

中西 貞一  
東京市麴町區內幸町一ノ五

印刷者

福神 和三  
東京市京橋區銀座西一ノ七

終

